

## 東映京都撮影所 新ポストプロセンター開設

大沢佳子 JSC  
OSAWA YOSHIKO

京都太秦の東映京都撮影所の門を入りすぐ右手にある厚生会館内のポストプロセンターがリニューアルされ、2018年7月25日、26日にその内覧会が開かれました。JSCから浜田毅氏と私が招かれ見学させていただきました。

### 京都にハーバールームが登場

編集室、MAルーム、試写室なども大きく変わりましたが、撮影部にとっての目玉はハーバー（HORBOR）回線の設置です。この回線でポストプロセンターのハーバールームは東京・大泉の東映デジタルセンターと調布の東映ラボ・テックとも繋がり、大容量データを迅速にやり取りできるようになりました。これによって京都のポストプロのワークフローは大きく変わります。

ハーバー回線は株式会社フォトロンによって運営されるファイル伝送サービスでハーバーネットワークに加盟しているポストプロダクションにネットワーク用の中継装置ハーバーボックス、そしてハーバーボックスと高速ネットワークで繋がったパソコンを設置することで、収録ファイル（あらゆるデジタルデータ）をNTTのダークファイバー網を使用した回線、または公衆回線を複数東ねて使う回線で、高速で伝送することができます。

今回、東映京都撮影所に設置されたのは後者で、2018年7月25日現在で100GBのデータを90分で東映デジタルセンター、東映ラボ・テック（調布）へと送ることが可能になりました。この時点では京都で撮影されたテレビドラマをハーバーで東京へ伝送し問題なく納品できたという実績があるとのことでした。

これより以前に東映デジタルセンターではハーバー回線を浜田毅氏撮影の劇映画『北の桜守』

で使用しています。冬編ロケの際、北海道のスタッフルームにハーバーボックスとパソコンを設置し東京の東映デジタルセンターへと収録データを送りました。『北の桜守』はARRI ALEXA XT3.2K、ARRIRAWで収録され、北海道稚内から送ったデータの量は約23TB。伝送中の事故はありませんでした。「ハーバーは転送が高速であるだけでなく、ハッシュ値比較による同一性を確保しているためにデータを確実に送ることができ、ネットワークも暗号化されているためデータ漏洩はありません。また撮影データだけではなく、音データやQT・DCP上映データ、編集データ、スキャンデータ、アーカイブデータなど非圧縮から圧縮のあらゆるデータを転送することが出来ます」と東映デジタルセンターの担当者はおっしゃっています。

現場からラボへの一方通行ではなく、東映デジタルセンター、東映ラボ・テックからの作業後のデータもハードドライブやディスクなどの輸送を介さずに迅速に撮影の地で確認することができることも大きなメリットです。東映京都撮影所、またはその近辺での撮影時に利用できれば大変な利便性があり、時代劇の撮影では京都のスタッフを頼る声が多い中、京都一東京の物理的な距離がもたらすストレスが無くなることは歓迎されます。

京都で、スタジオ撮影を中心に周辺でロケーション撮影をした映画を何本か経験されているDITの方はハーバー回線が京都に常設されたことに大きな期待を持っているそうです。長期滞在の撮影では、収録データはメインの大容量ハードドライブとバックアップのドライブ、さらにラボに郵送または人が運ぶドライブの最低3つのドライブに入れなければなりません。こ

れは最もシンプルな形でさらにバックアップが必要になることもあり、その仕事の負担は大きくなっています。

ラボへ送られるバックアップはラボでの作業が問題なく進むと順次メインのデータとなっていきますが、ハーバー回線はこの‘順次’のスピードを上げてくれるものです。ドライブを輸送する場合は3～7日分くらいのデータを入れて送るようなのですが、その間、現場のメインのドライブの存在の重さは増します。ここをショートターム化することは現場の負担を軽減することとなります。

また、モニターを注視するDITにとっては画面に写るものに対する責任感は半端なものではありません。それを早い段階でラボや編集部にチェックしてもらえることは安心感は大きく、京都のハーバー回線の存在はありがたいものになると感じているそうです。

もちろんラボとの距離が近くなることはDITと撮影部のみならず、演出、照明、美術、制作その他各部の仕事の精度を上げることにつながります。ラッシュが早く見られることは作品のクオリティを上げる事に直結するからです。ひとつの作品を作り上げる中でラッシュを見て、現在進行形で作品が進んでいるテイストやトーンをスタッフが共有すれば、次にやるべきことへの集中が高まります。

また、仕上げ作業の面においてもラボが現場と繋がる可能性が膨らんだ事は撮影側にとっては大変心強いことです。ポストプロ作業の中でスクリーン試写を1度も行うことなくグレーディング、MA、DCP作成を行う映画制作者がいる素晴らしい昨今の状況を改善する一助となるかもしれません。

今回の東映京都撮影所のハーバー回線設置は東映京都撮影所での撮影作品に限らず、また仕上げにおいては東映デジタルセンター、東映ラボ・テック調布のポストプロ作業に限らず、京都周辺で撮影される作品とハーバーネットワークに加盟しているプロダクションが活発につながることを目的とした、映像業界全体が活性化することを視野においた投資だとのことでした。



シンプルなしつらえのハーバー端末。ここから大容量データを送ることができる。

### こだわりのリノベーション

ハーバー以外の施設についても報告します。

ハーバーの端末処理の部屋は1階ですが、その他の施設は3階に集約されています。映像・音響制作環境の試写室、4つの編集室、3つのサウンド編集室、アナブース、フォーリー（効果音を作る部屋）、マシンルームがワンフロアに集約され、センターサーバーによるネットワークが構築されており各部屋とファイル共有ができています。全体が京都らしく和を意識した内装で落ち着いた雰囲気があります。

さすが撮影所と思わせるのは試写室のこだわりで、映像用サウンドをモニターできるように設計されているMeyer SoundのEXPシリーズを導入しており、その音響特性を十分に発揮させるために、Eastoneのスクリーンを採用しています。このスクリーンはEastone社とNHKエンジニアリングシステムとが共同で開発した8K対応のサウンドスクリーンで、従来の塩化ビニールのスクリーンとは異なり、生地を極細の糸で織り上げてあり音響透過が優れているそうです。穴の大きさが従来品よりも小さいため、モアレが出にくいとのことでした。世界的な品質基準THX認定を取得しているスクリーンで、この部屋はスクリーン試写の試写室として単独でも活躍して欲しい施設です。

施設紹介の他に切腹の作法を学ぶ俳優さんによるデモンストレーションや映画村の自由見学など時代劇愛に満ちたサービスもあり、京都の文化を感じる内覧会でした。